

オウンゴール

小野寺那仁

休憩時間。騒がしいクラスの雰囲気から私たちは取り残されている。

ねえ、アンディ！

さくらの声が耳に入るが、私は前を向いたまま。呼びかけには応じなかった。さくらとは話さないと心に決めていた。さくらが顔を近づけてくる。互いの前髪が触れ合いそうになり、私はのけぞり身を振ってさくらを避ける。

どうしてさくらは私をアンディと呼ぶのだろう？

聞いているの？

さくらは人間の匂いを欠いている。冷たいセルロイドで円柱や球体を組み合わせて作られているように思えた。彼女に友人はいるのだろうか？ 誰かが彼女と話しているのを見たことがない。休み時間の間中、ひたすら私に話しかけている。新しくできたシヨッピンモールで見つけた鉛筆削りやサンリオの弁当入れについて話している。そうして、しまいには必ず、今度、あたしの部屋に遊びに来てよと囁く。

新しいマンションだからさ！ 壁いちめん大きな丸いガラス窓が嵌っていて海を眺めることができるの。

彼女の独白は絶え間なく続いて、途中からは聞いていなかった。私は気が付いた。今まで彼女と話したことがなかった。彼女の名前さえも心に刻もうとしなかった。

ぼんやりしていると国語の授業が始まっていた。音読するようにと言われた。朔太郎の性的な喩を声に出す。にやけていると先生は真面目に読めと言う。でも先生も笑っている。今週に入ってから毎日読まされる。安藤先生は学校を出たばかりの若い女性だ。エコ鼻肩がひどいとみんな言っている。授業が終わりかける頃に私はまた当てられた。私は我慢できなくなった。

「どうして僕にばかり当てるのですか？ 読むのは僕だけでしかも二回目じゃないですか。僕はうまくしゃべることができないから朗読するのにふさわしくないし、僕だって他人が読むのをじっくりと聴きたいときもあります！」

「明史は国語で頑張れよ！ 俺はサッカーしか能がないんだから」英輔がおどけた。

「あら、そうでしたっけ。ごめんなさいね」先生はにっこりと微笑んだが、私は釈然としない。得体の知れない薬物を飲まれたような気分になった。

授業が終わってから先生は化粧の匂いをぶんぶんさせながら私の耳元で囁いた。

「明史くん、四時に職員室に来てくれるかな。担任の先生にも頼まれてることがあって」私は答えない。安藤先生から呼び出されるのは、これで三度目だ。今までの二回はすっぱかしている。初めに呼び出しを受けた両親は無視していた。本人には話しくいことですから、と担任は電話で告げたらしい。母親は学校で何をしているのか？ と私に問い質した。私は何もしていないと言った。母親は学校よりも私を信用した。一ヶ月も無断で休んだからじゃないかなあ。ああ、そういうことか、忙しいからお前から説明しておきなよ。私は、そのつもりはあったのだが今度は担任がへそを曲げた。直接話すことではないと、

どうしても私とは話そうとしない。それで副担任である安藤先生が間に入るようになったのだが私はなんとなく避けていた。先生の赤い口許が猥らに思えて何とも苦手であったからだ。真摯に自分のことを考えているのだろう担任のことを思うと安藤先生はなんとなく安請け合っている感がした。冗談に紛らせてしまう気もした。担任に比較すると軽い気がしてならなかった。それは私の両親にも言えた。

大人に対して反論したり歯向かったりするのは初めてかもしれないなかった。それで緊張して昂ぶっていた。ほとんど初めてとも言っているのだから落ち着かなかった。それで隣のさくらを一瞥したり、最前列にいる希海の背中を見たりしていた。私は希海を気にしている。一年の時から文系クラスでは首席を争ってきたからだ。同じクラスになっても話すことはなかった。希海は無口であったが男子の間では人気が高かった。表現力と言うか演技力と言うか内面の感情の動きが全身に溢れているから話さなくても何を感じているかは誰でも分かる。希海の背中が一定のリズムで揺れていた。おそらくは笑いをこらえているに違いない。私はそれを見逃さなかった。ふと見ると隣りのさくらはボードを遥かに割り込んだ十七点の古典の答案を恥かしげもなく机の上に広げていた。

クラスの中には私に反感を抱いている者たちが少なからずいる。理系進学クラスを目差している連中だ。彼らの視線は冷たく、白けていた。

人前で歌わなければならぬ音楽の授業を泥の中で身を振るようにやり過ごした。続くサッカーではオウンゴールを二発も決めてしまい、インターハイに出場した英輔に胸倉をつかまれ危うく殴られるところだった。テニスコートでランニング中の希海の脹らんだ体操服に見とれていたためだとは口が裂けても言えず私は平謝りだった。

次の数学は微分方程式の小テストだった。かつて四桁×四桁の暗算に成功したこともあったのだが一か所、6+7の計算を間違えたために藁半紙三枚の計算式は無駄になった。教頭でもある平野先生は「惜しいなあ」と笑って×を大きくつけた。それだけで数学は零点になってしまっただけで徒労感が重くのしかかってきた。希海が私の後ろに立っていた。それではしばらくそこに留まる。先生の顔に輝きが見えた。希海は正解だった！

「来年、君は理系進学クラスに行けるなあ」平野教頭は希海に言った。そして私に向かつてIQテストがいかに当てにならないか君は証明し続けているなど冷ややかに言い放った。自分の席に戻ってくるとアンデイ！合ってたよね、とさくらが答案を覗きこんできた。私は慌てて答案を隠した。さくらは私に白紙の答案を見せてきた。

「学校、辞めたくなるわ」

午後からの化学の授業中、さくらはずっと机の上に頭を横たえて別の空間を彷徨っていた。おそらく橋詰先生は私と希海だけが目を合わせることでできる生徒だったのだろう。彼は気が小さいのだ。希海が三問答えた。私が当てられて二問答えた。希海は三問とも正解だったが、私は二問とも答えることが出来なかった。私が立っただけで困っていると希海はかなり席が離れているにも関わらず元素記号の名称をあからさまに口走っていた。私に教えようとしているのだろうか。私は不快になってわざと間違えてやろうかと思ったが結局はわかりませんと答えた。それでも希海から私に僅かな意思を見せたのは初めての事だったので私はドキドキしていた。冷静に考えれば嫌味としか言いようがないが。

授業中にも関わらず、さくらはだしぬけに大声を上げた。

「アンデイ、モンタンにモルを教えてあげたんだよね。中学生の時にさ」

クラスの大半は笑うという欲求に常に飢えているからとりあえずドツと大きく笑ったが、誰も正確に言葉の意味を把握しているわけではないので、次第に教室の空気は濁り淀んでいった。さくらが私の名前である明史をアンディと、希海をモンタンと密かに名づけているのはほとんど知られていなかった。

よりによってなんということをやったのか、根も葉もない噂話の典型じゃないか。私の頬は恥ずかしさで赤々と染まっていたに違いない。希海は私たちを振り返って侮蔑の視線を投げてよこした。希海の横顔は緊張感に溢れて美しく見えた。ポートレート写真のようだ。陰影が鮮やかだった。希海はさくらを眺めている。やや眼を細めているように思える。反応としては過敏なのではないのだろうか？ 視線の先には、自由なさくらがいる。

「静かにしろよ、授業中だろ」私はさくらにそう言った。

「やったあ、アンディがついにしやべった！」いつの間にかさくらは立ち上がった。

意味不明の言動に今度はクラス全体が苛立ち始めたのか、誰も笑わなかった。そもそも私は無口なわけではない。どちらかと言えば饒舌でありさくらとは話さなかったただけだ。そしてクラスのほとんどはさくらに対して無視を決め込んでいたのである。先生は私たちの席の近くにやってきてさくらに注意した。

私は関わりたくなくなって窓の外ばかり眺めていた。

隣のクラスが校庭で器械体操をしているのを見て珍しく思った。この世界ではサッカー以外のスポーツを禁じられているかのように、いつグラウンドを見てもサッカーの試合が行われていたからだ。クラスの男子のほとんどがサッカー部員で彼らは授業中に疲れて眠っていても咎められることはない。多くの体育教師はサッカー連盟に属していた。バスケットもバレーも器械体操も柔道ももう久しくやっていない。いや特にしたいわけではないが。考えてみればサッカーは慣れてきたせいもあって楽ではあった。たまに行く陸上や水泳に比較すれば。

授業はさくらに中断されて凍りついたままだった。私の視線の先には強風にはためいている日章旗と青い梢が輝いていた。希海の背中越しにあった。希海も頬杖をついて器械体操を眺めていた。

三時半になってもさくらは帰らない。部活にも行かない。そのまま席に座っている。理由を問い質してみたくなったが、関心を抱いているとは思われたくない。さくらに関心を抱き始めたら何もかも終わるようにさえ思えた。それで希海の方を見てみると長い脚を折り曲げてソックスを履き替えている。同じような白いソックスなのだが陸上の練習のためなのだろう。希海を視界に入れておくことは、ほんの僅かな私と外界との繋がりにも思えた。

数人の生徒がグズグズと教室に居座り続けていた。

やがて平野教頭が現われた。今から赤点の生徒の補習を行うから該当しない生徒は出ていくようにと告げた。赤点でなくても勉強したければ残ってもいい。ほとんどの生徒は立ち上がった。三人だけが残っていた。真っ先に希海が教室を出ていく。私も出ていくことに決めた。

「先生！ 補習は職員室でするんじゃないんですか？」クラス委員長の久米が抗議する。

「今まではそうだったんだけど、組で十人も赤点がいたから職員室が一杯になってしまっ

てな。このクラスでもひとつ間違えば十人くらいにはなるよ。ほとんどが五十点以下だからな。確か君も今回は芳しくなかっただろう」先生は久米に向かって言ったが顔は私の方を向いていた。久米は鞆を担ぎ上げると逃げるように教室を去った。

自分の属する部活の部室に行くか、安藤先生との約束を守って職員室に行くかだった。もし茶道部に男子が一人でもいれば私は茶道部に入部していたかもしれない。女子ばかりだったのでそこに入るわけにはいかなかった。演劇部や文芸部があればそちらに入ったのだろうか、私たちの高校にはなかった。新たに部をつくるというのは、とうてい出来そうになく私は誘われるがまま放送部に入った。放送部ではトラブル続きで、私と口を利く女子は誰もいなかった。私が部員の英子に対して煮え切らない態度を取ったのが部内の女子全体の反感を買ったに違いなかった。それから年度のしよっぱなから一ヶ月も休んでいた。ので番組の編成に支障を来して、謝れ、謝らないの問答になった。折り合わず平行線のままだった。自然に部に顔を出すことは少なくなった。私が学校を退学してしまうのではと思われるようになった。録音担当という明らかな裏方になってしまい以前のように私のシナリオを元にして番組をつくることはなくなっていた。

ためらいながら放送室の前まで来ると録音中で中に入れなかった。網の入ったガラス越しに中を覗くと数人の部員が動いていた。私に気が付いたようだが中に入れとは言わなかった。私は居場所を失った気がした。微かに漏れているのはクラシックの楽曲だった。耳に届く木管楽器の音色は懐かしい感触を私の各器官に呼び覚ましていた。

その気分のままに私は職員室に行くことにした。得意科目の国語の教師に相談するのは屈辱に思えてならない。それは似通った回路の閉じられた世界で堂々巡りの話をするだけにならないだろうか。

例えば担任の川岸先生は年配の英語の先生だ。常々、これからは国際舞台で活躍しなければいけないと口にはしているものの発音は明らかにジャパニーズイングリッシュで少し訛りも入っていてとても真似できたものではない。中学生の時も英語の先生は祖母と同じくらいの年配の先生で、昔は英語を勉強していたのはパンパンくらいで戦後だいたいぶたつても私は非国民となじられたものさと私たちには理解できない話をしてきた。けれども英語の先生たちが言われることには夢はあった。確かに多国語を自由に操れば私たちの世界は開ける。それは政治・経済や数学や物理・化学にもいえる。未知の世界が開けてくる。けれども国語、ことに古典や漢文や日本史などは学んだところで私たちの何かが変質していくものではない。それらは未来に向かわず過去に目を向けたものだ。今では役に立たなくなった公式や法則を科学がいつまでも保管しているというものは絶対はない。だから安藤先生と話してみてもおそらくは私の気持ちは伝わらないだろうと思うのだ。そうはいくものの私の成績は英語をはじめとして軒並み一年の頃に比較すると著しく低下しているのだった。

夢見る前に可能性は削られていった。

他の生徒がどう考えているか私は気にしなかった。ふたつの道、サッカーでインターハイに出場して栄冠を勝ち取るか、理系進学クラスに三年になったら入る。私たちに残された選択肢はそれだけしかない。息が詰まりそうだ。私にはそのどちらもたいして魅力的には映らない。自分の考えを纏めて手帳に記した。安藤先生にそう伝えよう。

職員室の硝子戸を引くと汗の匂いが充満していた。補講の生徒でいっぱいだった。窓際にいた安藤先生は近視なのか眉間に皺を寄せて私の方を見た。立ち上がってニコリともせず私を手招いた。

「やっと来てくれたんだ」机の隣りに椅子を並べた。「どこでいい？」

私は頷いた。そうしていると落第点を取った補講の生徒と変わらなく見えた。

カルテじみた書類を引っ張り出すときこちなくめくった。

「川岸先生ショックを受けているそうよ」安藤先生は笑いながら言った。笑い事ではないだろうと私は少し憎んだ。

「クレペリン検査でもかなりの異常値なんだ。真面目にやってないんじゃないの？」

「そんなことはありません」

「こういう検査は真面目にやらないと何の意味もないんだから。あなたに限らずクラスのほとんどが異常値を出しているようなんだけど」

「真面目にやらなかったら全部はできないはずですよ」

「止めと言われてもやったらできるわよ」

「単純な計算は得意なんです。珠算をしていたから」

「ああ、そう思って数学の平野先生にも相談したんだけど微積分じゃ計算ミス連発じゃそうじゃない」

「それは、実は最近になって調子が悪くなってきて」

「問題は中学の時にやったIQテストの結果なんだよね。何、この異常値」私は黙っていた。親が呼び出しを受けたのもこれが原因だった。川岸先生はセンターからの結果をひどく気に病んでいるらしい。

「言ってもいいのかな」

「少しは親から聞きました」

「こんなのあたしは気にしないけどな。あてにならないし普段からあなたを見てるとそうは思わないから」

「わかりました。はっきり言ってください」

「自殺する可能性90%だって」

私は驚き呆れた。死について考えたことなどほとんどない。どういう判定基準なんだろう。

「そんなのデタラメです」

「テストの時の心当たりは？」

「あ、たぶん図形の相似形を探す問題のことかと思えます」

「詳しく教えて」

「はじめ問題を見た時にこんな難しいのはとてもできないだろうと思っていましたが、初めの何問かをやってみたら、問題を見た瞬間に答えが浮かぶようになって面白くなってどんどんページをめくるくらい速度でできたんです。全部やり終わって、それで別の問題もやっちゃいました。その時は味わったことのないような気持ちの良さがありました。やってはいけないことは知ってましたが、問題が簡単に解けるのは気持ちがいいんでその誘惑に負けてしまいました」

「ああ、そういうことなのね。要はたまたまできたっていうだけなんだよね。別の問題ま

でやったのはまずい。そりや異常値になるわよ。川岸先生にはつきり言えばいいじゃないの？」

「言おうと思ったんですが川岸先生が避けているようで言い出せなかったんです」

「そりや自殺可能性が90%の生徒がいきなり四月から一ヶ月も休めば避けたくもなりませんよ。でも川岸先生どうして連絡を取らなかったのかしら」

「何度か電話はくれましたが、僕はいなかったんです。その時、東京にいました、母が心配されなくてもいいですからと先生に告げました、東京のひいおばあさんが危篤なんで祖母と様子を見に行つてたのです」

「それは本当の事なの？」

「一応、本当です。ひいおばあちゃんは死んでしまいました。なかなか東京には来られないので葬儀をして初七日や四十九日も済ませたのです」

「でもあなたは別の事をしてましたね。ちゃんと照会があつたからこそこそしても隠せないのよ」

「ああ、受験のことですか？ はい、僕は確かに祖母の薦めで東京の私立高校への編入試験を三月末に受験しました。でもその高校はとても難しくてはじめて合格するなんて思つていなかったんです。先生には年度末だったから相談しませんでしたけど。誰に相談していいのかわからなかったから」

「そういうこと。辞めるつもりだったの？ 学校が気に入らないから」

「いえそういうわけじゃないんです。祖母が東京の出身で、もうこのまま余生を東京で暮らすといつてきかないから。それで僕もあと何年かして東京の大学に進学するなら高校のうちから東京で暮らせばいいんじゃないかって祖母を初め親戚が言い出したんです」

「周囲はそう言つてるのね、それで明史くんの気持ちはどうなの」

先生は手帳に書く手を休めて私の顔を覗き込んだ。傾いた陽射しが眩しい。

「いえ、あの高校は無理なんです。周囲の人が買い被っているだけです」

「無理とかじゃなくて！ あなたの気持ちです。私が知りたいのは！」

「よくわからないんです！」

「行きたいんですよ。東京に」

「知つてどうするんですか！ ロじゃうまく言えないから書きました」

安藤先生にメモを渡す。人のたくさんいる場所なのにデリカシーのない人だなと思う。

「国語の成績からみるとそうは思わないんだけど。他の科目はそれほどでもないの？」

先生はカルテに目を落とす。捲る。また捲る。目を見張る。顔が強張る。

「ひどいね。ほとんど赤点寸前じゃないの。見損なつたわ」口元が歪んでいた。

「これが現状なんです」私はうなだれた。

「まあ、次回頑張ることね！ それなら学校が嫌だから転校したいとか人間関係で悩んでいるとかそういうことはないのね。学業不振は四月に授業を受けなかったからなのね」安藤先生はカルテを閉じた。

「特にないです。部活ではちよつと仲違いしてますが」

「じゃあ伝えておくからね。川岸先生に」安藤先生はウインクをした。私は素直には喜べない。安藤先生は自分の中の疑問が解消されればそれでいいだけなのであった。

翌日は朝から川岸先生の授業だった。温厚で心配性の川岸先生は長く農業高校で教えていて、本校では学校農園の面倒を見ていた。前任校では牛馬の世話が生甲斐だったと語った。浅黒い皺の刻まれた顔は篤実そのものだ。無法者の襲撃に脅かされる西部劇の被害者に似ていなくもない。

先生の眼は黒くて小さくて紛れもなく日本人であった。

リーダーの授業は退屈極まりない。途中で補講受講者の名前と点数を発表した。私は三十五点、赤点ボーダーは二十五点なので免れる筈であったが、私の名前もあった。抗議したいところだが何かあるのだろうかと思った。

「前回のテストと比較すると著しく成績が下がっているの」とだけ理由として付け足した。

「哀しいよ。アンデイがそんなに成績が悪いなんて。あたしと一緒にじゃない」もちろん説明などはしない。私は沈黙を守り続ける。それよりも希海に知られたのはショックだった。心底軽蔑の対象になったに違いない。もう何もかもがおしまいだ。川岸先生は復讐したのだ。

安藤先生には言えることを何故私には言わないのか、おそらくそう言うだろう。メンツを潰されたから教室で私に恥をかかせようと試みたに違いなかった。

フアーマーは篤実だけでなく陰険でもある。

発奮材料にはとうていならなかった。私はひとりでもがき苦しむだけであった。

もしかして何らかの有効な助言をしてくれるかと期待した安藤先生には事務的にあしらわれておまけに裏切られた。きつとありのままに川岸先生に知能検査の不正を伝えてしまったのだろうか。そこをうまく伝えられなくてどうして国語教師と言えるだろうか？

午後、いつものように希海はソックスを履き替えている。長い引き締まった脚は毎日走っているだけあって筋肉が盛り上がっていた。

教室に残っているのは、私とさくらと島田英輔とその他数人。川岸先生は希海に早く出ていくよう促した。その言い方はひどくそっけない。

リーダーの試験は前回のテストと同じものだったので難なく出来た。英語の成績が悪くなったのは数学と物理や化学ばかりを勉強していてそこまで手が回らなかったからだ。理系進学クラスは希海が希望しそうだから私もそうしようと思っただけだ。

提出すると他の生徒は唸りながら机に齧りついていた。

先生は私を手招いた。それから私の耳を牛にするように掴んだ。

「IQテストは不正って本当なのか？ 安藤先生から報告受けたぞ」

「はい」

「それについては以前のことだから咎めないが。まったく、心配したよ。私は安心したけど、理系の先生たちはセンターの分析結果よりも問題を解いたことに重きを置いているよ」

「うだぞ」

「いえ、あれはまぐれですから」

「私も君は理系じゃないと思っっているが将来を考えるならそっちのほうがいいかもしれん。だがいずれにせよ英語は重要だ。君はあまりよくわかってないようだ」

その後、根掘り葉掘り尋ねられたが私は「はい」と繰り返しているばかりだった。自分の言いたいことが、ちっとも表現できないもどかしさは残ったが、川岸先生との関係は修

復されたようで安心した。特に他校を受験したことについてはまったく触れられなかったので先生に対しての信頼感は何られた。陰険と感じた自分を恥じた。

補講を終えて教室を出ようとするとさくらが走り寄って来た。

「部活しないの？」

「辞めるかもしれないな」川岸先生との関係が改善されたためか、いつの間にかさくらとしゃべっている。

「their own children 〇〇何？」

「ああ、さっきやったじゃないか」

「own 〇〇」

「俺も知らないよ」面倒なのでそう答えた。「詳しくは」

突然、背後から英輔の声が聞こえてきた。

「own は own goal だよな。オウンゴールといえば明史が代名詞」

「喧しいな」

「坂本先生が明史をサッカー部に入れたって言うってたぞ」

「どうして？」

「いろんな理由が山ほどあるみたいだぞ。もちろんプレイヤーとして期待されてるわけじゃないけど」英輔はにやけている。

「でも一緒に補講を受けるなんて夢にも思わなくてなんだか嬉しいな。明史も俺たちの仲間になったかと思うと」

「それ、言えるよね。勉強ばかりしてるようなイメージだったから。希海と一緒にさ」

「言っておくけど新井さんとは一度も話したことはない」

「あたしとだって今日初めて話すじゃない」

英輔の身長は180センチを超えているだろう。見下ろされているようだ。英輔は思いついたように言う。

「今からサッカー部の部室に行かないか？」

「ダメ。アンディは私の家に来ることになってるの！」私はさくらを正面からようやく見つけた。

「行かないよ」

「そんなこと言うなよ」

「強引だな」

「私、勉強して海外に留学することに決めたの。だから英語教えてくれないかな」

「いつ決めたの？」

「今」

「適当な人だな」

「サッカー部には明日行くようにするから今日は私の家に連れて行くわ」

英輔は立ち止まった。

「それなら明日な。必ず」私は入るつもりはなかったが、坂本先生の話には興味があった。一年の時の担任でもある。その進路相談の際に独特の意見を展開していたからだった。

さくららは私の腕をカエデの葉のような小さな掌で掴んでいた。

樹木の鬱蒼と生い茂り、何の建物かわからない外観の、郵便局の前を歩いていた。

二手に分かれた道はどちらも結局は駅に通じる。人通りの少ない路地をさくらが選んだ。学校のある町から電車で小一時間はかかった。少し曇っていたから潮風が吹きすさんでいた。歩いている間中、学校の近くにできたショッピングモールの話をしていた。さくらの住む町にはコンビニさえないそう。私はこれまで自分のことばかりを考え、外界を遮断していたに等しかった。放送部以外の人間関係を知らなかったのも、さくらから聞く話は真実かどうかは疑わしかったが、興味深かった。何人かの女生徒が援助交際をしているとか、クラスの誰と誰が付き合っているかという話だった。私は彼女の話をあまり信用してはいない。

「ここで生まれたわけじゃないのよ。お父さんが騙されてしまったの。マンションは新しいんだけどちよつとここはねえ」さくらの歩みは緩やかになっていった。

「ああ、それはこの前聞いたよ」

「アンディ、疲れてない？ あたし疲れたわ」さくらはしゃがみこんで携帯電話を取り出した。何処かに掛けている。それからあれこれ話し始めた。

「お母さんがレクサスで迎えに来るって」

「そんなに遠いの？」

「うん、まだ山をひとつ越えなきゃいけないからね」

「自転車は？」

「いつも送り迎えしてもらってる」

「意外とお嬢さんなんだな」

「だって危ないでしょ。誰も歩いてないよ。車に轢かれるかもしれないし。一応、あたしだって女の子だからね」

「そう言われればそうだよ」

「今日はアンディがいるから大丈夫かなって思ったの」レクサスって高級車じゃないか。私は携帯すら持っていない。特に欲しいとは思わなかった。

サングラスを着用したさくらの母親は派手に髪を染めていた。言われるままに車に乗った。私に対してさくらの母親は慰めだった。友だちがいないようだから仲良くしてあげてね。他の母親と変わらないことを言った。けれどもさくらの母親が言うとは普通でなく不気味に思える。

繫留してあるヨットやモーターボートは漂着物のように傷んで表面が剥げていた。波のしぶきがかかる場所に、円筒のリゾートマンションが二棟聳え建っていた。外観はかなり古びている。新しいマンションとさくらは言っていたが。地上から数えると三十階以上はあるだろう。私はまだ強い風の残る海辺に立って、威容に眼を見張る。

「すごいですね！」私は感嘆の声を挙げた。

「私たちはひどくゆっくりとしたエレベーターで二十九階まで上がって行った。

「このあたりの地価は震災以来ひどく下げているのよ。マンションも耐震基準前のバブル期の物件だから空き部屋ばかり。格安よ。風の強い日には揺れている。南海トラフに耐えられるのかしら」

クリーム色に統一されたまばゆい光に満ちた部屋に通された。なるほど巨大な一眼レフカメラのレンズのような丸窓が海に面して嵌っている。そこから岩礁や小さな港、彼方の

空港島や行き来するタンカーや貨物船を眺めることが出来た。しばらく眺めていると母親は檸檬と紅茶を運んできた。シナモントーストが付いていた。まるで喫茶店のようだった。「あっちに行つてよ」

来る途中にあれこれ話していたのですっかり母親は私を信用したらしい。すぐに出て行く。衣装ケースの上やテレビの周囲には高校のセーラー服や詰襟の制服を着たフィギュアが窮屈そうに並んでいた。二十センチほどはあっただろうか。精巧さが不気味だった。秋葉原などで売っているのだろうか。

「これパルモアの人形よ。いいでしょ」

「いや知らない」

「知らないの？ これモンタン」さくらは一体の可愛らしい人形を手にした。

「賢くてスポーツマンなの」

「マンつて。これ希海さんと関係あるの？」私に人形を手渡す。特に似ているとは思えない。

「パンツとか見ないでよ」

「見てないよ」人形を見てもしようがないだろうと私は思った。

「そうよ。似てると思うんだけどなあ」

「似てねえよ。強いて挙げれば髪型がショートヘアつてところぐらいかな。ああそれで希海さんのことをモンタンつて言つたのか」

気が付くと母親が立っている。

「アニメの話ですよ。お父さんも好きだからね。これ一体で何万円もするのよ」

「パルモアつて」

「そういう通販のお店があるみたいなの。あなたもフィギュア好きなの？」

「いえ、僕はこんなの初めて見ました」

「アンディは何にも知らないって！」

「これサツカー少年のサンダースよ。背が高くて英輔に似てるでしょ」

「おお、確かに」さくらはサンダースとモンタンをくつつけてチュツチュと言いながらキスさせていた。

「よせよ」

「あら妬いてるんだ」

「バカなことしないで勉強でも教えてもらつたらどうなの？ ちょっとスーパーまで買い物に行つてくるからね」言い捨てて母親は再び出て行った。

さくらはステレオのポリウムを最大限にしてレコードを掛ける。そういったものを私は初めて見た。轟音の奔流が部屋を埋め尽くす。ジャケットはひどく傷んでいてボロボロだった。

「ヴァンヘイレン？」ジャケットの文字を読んだ。

「お父さんのよ。お父さんはね、売れないミュージシャンなの。お祭りとかで唄ってるよ」「こういうのを？」

「そういうのを。でもちよつと違うかな。ヘビメタルつていうのかな」

「ヘビーだろ」音量に負けないように私は大きな声で言った。「そうヘビー」

「さあ勉強するか。留学するぞ。この部屋に居ると海の向こうが気になるからな」さくら

は大声で叫んで立ち上がった。私はさくらが希海とまったく同じ制服を着ているのを恨めしく思った。これが希海だったらどんなにいいことだろうか。

「彼女は海を見ていた」私は不意に呟いた。

「何？」

「訳してみて」

「英語に？」

「そりやそうだよ」

「おお、こ、これは。同じ言葉が並んでいる」さくらが言う。

「？」ノートに目を落とす。私は目を疑った。See see see.

「なんだよ。それ。ふざけてるのか？なんで彼女がSee。Sheだろう」

「うう、そうだった」

「シーソーザシー」

「アンディも川岸先生も発音が悪いなあ」

「お前、発音以前だろう。これは過去形、これは定冠詞」さくらはぐちゃぐちゃだった。

山のような学習塾の教材や通信添削の教材を持ち出してきたが、ほとんどが新品だった。

「俺らの高校は学校自体アホだからな、その中で最下位だとこれくらいになるか」

「うーん、モンタンやアンディが神様に思えた時もある。あーあ神様は不平等だな」

「そりや何にもやってなきやそうなるだろう」それからしばらく勉強したがさくらはすぐに飽きてしまつてゲームを始めてしまった。

「アンディ。一番の成績の子は孤独だよな。誰も俺の気持ちをわかってくれないって思ってるでしょ。だからモンタンが好きなんですよ。でも一番を守り続ける子と一番からだんだん下がっていく子とは違うんだよね」

「なんだそりや、あてつけがましいな」

「ずっと最底辺の子もいるし、いつも平凡な点しか取れない子もいる。どんなに頑張っても十番から上がらなくて力尽きる子もいる。だからみんな孤独なんだよ」

「それで？」

「もしあたしが勉強していい成績を取ったら誰かが最下位に落ちて悩むかと思うと悲しくて勉強できない」

「最下位を抜け出してから言えよ」

「ねえ、モンタンが化学分からなくてアンディに教えてもらったからアンディに教えてもらいなさいって言ったのよ。教えたの？」

「教えてないって。俺は希海さんとはしゃべったことがないんだから」

「じゃあモンタン嘘ついたの？」

「知らないよ」

「悲しいなあ。桜が咲いている頃はモンタンと友達だったのに！」

「知らない、知らない。俺は何にも聞いてない」

「アンディはモンタンのこと知らないのよね、みんなが思ってるほど良い子じゃないよ。きつと」

「そうだろうか？ 私はこの話を聞いて、希海は優しい子なのだと思いますのだけど、でも何か変わった部分もある。」

それにしてもこの窓からの景色はなんと眺めなんだろう。このツインタワーを設計した人は安全性を無視しても手に入れたいものがあつたのだ。

校舎から出るとすぐさまバグからサッカーボールを取り出し英輔は、足の上にボールを滑らせたリ少し強く蹴って、空中にボールを浮かせ頭の上でバウンドさせたりと曲芸のようにボールを操っていた。

「何してるんだ。真剣に」

「リフティングだよ。見てると面白いだろ。やってみると大変だよ」

「僕もやらなきゃいけないのかな、そんなの無理だと思うよ」

「さあ、入部するならやらなきゃな。でも今さら始めてもレギュラーにはなれねえからやらなくてもいいんじゃないか？」

「じゃあ、何をするの？」

「マネジャーだな、俺らのユニフォームを洗濯したりスコアを付けたりするんじゃないか」

「そんなの嫌だなあ」

英輔がリフティングしながらジグザグにグラウンドを進んで行くので部室まで随分かかった。グラウンドには野球部や陸上部が練習していてじわじわとサッカー部員たちが皆リフティングしながら中央に集まりつつあつた。

「連れてきました」

「おお、明史。サッカー部に入る気になったか！」坂本先生は狭い部室内でリフティングをしていた。ボールをいきなり私の顔面に蹴ってよこしたが、頭に当たってうまい具合に先生の脚に届いた。

「へディングうまいじゃないか」

「何もしてないですよ」

「そりゃそうさ。あ、英輔は練習に行けよ」

浅黒い顔突き出してくる。部室の中は湿っていて汗臭い。

「マネジャーさせるために呼んだんですか。僕はリフティングなんてできませんよ」

「ん、やらなきゃきんどらうな。安藤先生から聞いたよ。成績悪くなっちゃったんだってな。明史、気分転換も必要だよ。身体を動かしてすっきりした頭で勉強するのさ」

坂本先生はまだ若い。三十過ぎたあたりだろうか。

「マネジャーといつても作戦を立てたりマークすべき相手を偵察したりしてもらいたいんだけどな。選手としては全然期待してないからそっちはいいんだけど。けどオウンゴールばかりしていちやつまらないだろう。今までに二十点は超えているそうじゃないか」

「はい。でもデイフェンスばかりなんで多少は仕方ないです」

「それは意図的に自軍のゴールを狙ったものか？」

「え？ そんなことはないです」

「じゃあ、どうしてなのかな」

「相手のシュートを蹴り損なったりしました。まあ僕に技術がないから」

「教えようか。もちろん技術があればオウンゴールは減っていたが、ほとんどはサッカー部員がお前の身体に当ててゴールしたものだ。そうしろと指示した。同じクラスだから英輔は知らないだろうが。つまりお前のポジションニングが悪いんだ」

「ああ、そういうことなんですか」

「お前がキーパーに近過ぎるんだよ。オフサイドポジションも狭まってしまふ。それに気が付いていない英輔もまだまだだな。まあ普段の体育の授業くらいではオフサイドまで煩く言わないだろうけど」

「二宮先生は何も言わないですよ」

「ああ、彼は陸上競技の先生だから知らないんだよ。どうだ、少しはやる気になったか？」

「いえ」

先生は話している間もずっとボールを操っている。

「まあ少し練習するから見て行けよ」坂本先生はグラウンドに飛び出して行った。私も後についていく。

それから全員で準備体操をしてからミーティングに入った。戦術論が中心であったが私には理解できない。その間中、リフティングは続けられていた。

「明史もやれよな」言われてしぶしぶ私もリフティングを始めた。いったん部室に戻って余っているウェアを借りた。

「来週に他校との練習試合を組んだ、相手は西高。ありや弱いから楽勝だと思う、弱い奴に勝つても下手になるだけだ。それでお前らに課題を与える。前半は明史をディフェンスで使う。いかに彼をカバーするか、明史はディフェンスの時はゴール前に突っ立ってろ。

動かなくてもいい。これでオフサイドにならないから相手はどんどん攻めてくる、それでもゴールを守れ。十人になった時の練習だと思え。後半は明史をフォワードに使う。そしてパスを回して明史にゴールさせるんだ」

「無理でしょう」英輔は苦笑した。

「そうかな、練習としてはいいと思うけど」坂本先生が言う。

「やっぱり無理か」

その時、眩い光を放つ赤いショートパンツ姿の女子陸上部員たちが三人近寄ってきた。

「英輔！」三人は口々に言う。

「あれ、明史くんじゃないの。いつの間にサッカー部に入ったの？意外に似合ってる」

実にあっけなく希海は私に話しかけてきた。上気して息を弾ませる。胸の先端が異様に尖っているのを見て目がくらんだ。

「今、入った。あ、先生、今度の試合面白そうです！やります」

「西高にもハンディをやらないと可哀そうだからな、あとキーパーも西条、お前やれ」

おそらく西条という部員もあまり上手くないだろう。知らない奴だった。

「先生、あんまりな言い方！明史くん見返してやりなさいよ」それから希海はカラカラと乾いた声を上げて朗らかに笑った。だが部員たちは皆乗り気ではないらしく訝しげな表情で私を眺めていた。

その日はドリブルやシュートの練習もしたが、散々だった。次の日も次の日も練習した。毎日、希海と少しではあるが話すようになった。私にとっては夢見心地な日々であった。

試合当日は朝から雨が降っていて本当に試合が出来るのだろうかと思つたがサッカーは雨でもやるのだらうと思ひ返した。「おい、今日は頼むぜ！」冗談めかして英輔が声を掛けてきた。「俺の実力をお前に思い知らせてやる」今や休憩時間にはさくらと私をサッカー部

員や希海たちが取り囲んでワイワイと騒ぐようになっていた。

「自信はどうなんだ！」

「全くない。ドリブルが全然ダメなんだ」

「おお、それだったらパスを受けたらキープせずにすぐに蹴れ。すぐにシュートだ。西高って言ってもお前よりは遥かに巧いぞ」

「坂本先生はそんなことを言わなかったぜ」

「一点取ればいいんだろ。試合中に俺が指示するから。俺の言うとおりにするんだ。先生は個々の判断に任せている。お前にはまだ無理だろう」

「ああ、そうだなあ。坂本先生はいいパスが俺に回れば俺でも得点できると思ってるんだろうな。そんなの無理だよ。フォワードなんてやったことないんだから。英輔の言うとおりでよ」

さくらが私に話しかける余地は全くなかった。さくらは苛立っていた。

「あんたたち、煩いんだよ。今までアンディに見向きもしなかったくせにさ」

「みんな見に来いよ！俺の全力プレーを見せてやるからな」英輔は高らかに宣言した。

私たちは赤いユニフォーム、西高は青のユニフォームで揃えていた。西高は進学校で私は受験に失敗していた。それで多少なりとも闘志は沸いていた。彼らの顔は青白く眼鏡を掛けている生徒が多い。おまけに背も低く、見るからに弱々しい。これなら勝てるだろう。坂本先生は前回のミーティングでは私や西条を使うのはハンディと言っていたのもわからないでもない。

ぬかるんだグラウンドに立つと少し風が強いのがわかった。だが陽射しは強く、動いていないのに汗ばんでくる。

ゴールの後ろにはクラスの連中が応援に来ていた。さくらもいた。川岸先生もいる。もちろん希海もいたので私の緊張は最大に達していた。何日か練習していたので私はゴールの直ぐ前に立っていても、もうオウンゴールを叩き込むことはないだろうと安心しきっていた。するとキーパーの西条が話しかけてくる。

「相手が蹴り込んできても触るなよ」

「え」

「俺が止めるから。下手に触って方向が変わるからゴールになるんだよ。いつもそうなんだろ」

「ああ、そうだな」

「もっと前に行けよ。相手をマークしなきゃ。それでドリブルの球を奪うんだよ」

「奪えないよ。それにここにいるのは先生の指示なんだ」

「今日はミッドフィルダーに英輔が入ってるからカパーする気なんだな。今日だけは絶対オウンゴールは避けるよ。みんな見てるんだから。恥だろ」

すると私はオウンゴールを極端に意識せざるを得なくなった。西条の言うとおりで思いポジションを移動した。

甲高い笛の音が鳴り響いて試合が始まった。

「明史くん、ポジションがおかしいって！」騒がしい中でかすかに聞こえた。希海が発する波長の異なる声が聴こえる。私には聞き分けられるフルートのような響きだ。私はじり

じりと戻る。

ところがほとんど、敵エリア内での自軍の攻撃ばかりで、センターラインからこちらにはまったくボールが来ない。

「暇だなあ」

「ああ」私は西条と話していた。

「もっと前に行けよ。大丈夫、誰も来ないって。なんでこっちに来るんだよ」

「今、聞こえただろう。希海さんの声が。ゴール前に居ろってさ」

「なんであいつの言うことなんか聞くんだよ。ばーか」いや希海の意味じゃなくて先生の指示を反映したんだろうと私は思ったんだが。

攻撃を繰り返して何本もシュートが放たれたが、初めからほぼ全員で守っている西高のネットは揺れなかった。

「なんだかイライラする展開だな」だんだんと味方の選手は攻撃に向かってしまっていてセンターあたりは無人になってしまった。次のシュートはキーパーの真正面。

「来るぞ！」西条が叫んだ。

それは本当だった。キーパーが高々とボールを蹴ると西高フオワードが続々とこちららに向かってきた。

「チャンスの後にはピンチあり」

「行けよ。妨害しろよ」

私はしぶしぶ走り出した。戻れ、戻れという声もあったがほとんどは「行け！」という声であった。どっちなんだ！走ってくる相手にドリブルでは対抗できないから滑り込んだ。相手は倒れた。私も倒れたが、直ぐに立ち上がって自軍ゴールに戻る。ボールの行方を捜す。ボールは空中に浮かび上がって、二人の選手が激しくヘディングを応酬し合っていた。それを見て私は全力で元のポジションに戻って行く、私を追いかけ西高の選手が私に並走してくる。私は意味がわからない。そいつは手を挙げた。私のいる右サイドの方が守りは手薄で皆左サイドに集まっていたのだ。それでパスが飛んできた。私は奪おうとしたが簡単にかわされた。そして背後からシュートを窺っている相手の僅かな隙を突いて先に滑り込んでボールを蹴った。大きく逸れるように蹴ったつもりだったが、足の甲にまともに当たったボールは左ゴールポストの辺りに一直線に飛ぶ。反対側にいた西条の焦った顔がちらりと見えた。ボールは西条をかすめてボールの内側に当たりコロコロと転がってネットを揺らした。

「ああ、オウンゴール」さくらが叫んだ。続いて聞こえてくるのは罵声の嵐と笑い声。私は耳を塞ぎたくなった。

「やっちゃまったなあ！キーパー正面なら良かったのに」英輔が言った。

西条の怒りは一気に頂点に達した。

「お前、わざとだろう。俺に恥をかかせようとしやがって！」

「いや、すまん」私はいつものように平謝りだった。坂本先生が飛び出してきた。タイムをかけてみんなが集まる。

「おい、何で余計なことばかりするんだ。ゴール前にいればいいじゃないか」

「でもパスの時に僕より前に相手がいたから、あれってオフサイドじゃないんですか？」
「オフサイドにしたってその判定がある前にお前が蹴り込んだじゃないか。相手にパスが

渡っているとは言い切れないんじゃないか？」

「こんな練習試合でオフサイドも何もないんだよ。審判だって一人だけだし」西条は明らかに苛立っていた。

「先生、今のゴール、僕のせいですか？」西条は聞いた。

「いや、みんな悪い。俺のイメージと全然違う。相手の下手に合わせるんじゃないか。お前らちゃんとパス出してるか、適当にシュートしてるだけじゃないか。攻撃に失敗したからやられたんだ」

試合が再開されると英輔はじめ何人かが攻撃の手を緩めて守備に回るようになった。すると相手はカサにかかった攻撃を仕掛けてきた。今度は私の反対側のサイドが破られた。私のいる場所を固めたので反対側が手薄になったのだ。パスが渡りセンターから相手がシュートした。閃くような当たりで私は動けない。西条も動くことが出来ない。あ、二点目と思つた瞬間、走り込んでいた英輔がボール目がけて思い切り突っ込んだ。地面すれすれの低い弾道に向けて正確にダイビングした。頭部にボールが当たり逸れて行った。ゴールは免れた。おおっと歓声がどよめいた。

「これだ！これが俺が見たかったプレーなんだ」坂本先生は立ち上がっていた。ところが、英輔はなかなか立ち上がれない。

安藤先生や希海が英輔の周りに集まってきた。

「大丈夫？」安藤先生の悲鳴にも似た声が耳に届く。

「あ、ひどい擦り傷」希海が英輔の手を掴んで起こそうとしたので集まった女子が皆で抱き起していた。西条と私も手伝った。希海に抱きかかえられる様にされては英輔も立ち上がらざるを得ない。私はものすごく羨ましかった。おそらく西条もそう思っていたに違いない。

「早く後半にならねえかな」西条が言った。

「お前がいると不安で仕方ないんだよ」

「わざとじゃないよ」

「今のシュートだってお前をカバーしようとし過ぎたせいで打たれたんだろう」

「お前こそ何で前に出ていくんだよ。ちゃんとゴールを守れよ」

「何だこの野郎！」

英輔はフラフラとしていたが戦線に戻った。しばらくは立っただけだった。フォワードが必死に攻め込んでいたが何本かのシュートは空しく弧を描いてゴールを外れるかキーパーの両腕に収まるかのどちらかだった。

前半が終了した。集まると試合に出られない選手たちが不服そうなのが明らかだった。

通常なら私と西条と負傷している英輔は、交代しても不思議ではなかった。だが、坂本先生はフォワードもディフェンスも悪いということと三人はそのままにして、成果を上げられなかった別の五人を入れ替えた。予定通り私は右のフォワードに変更になった。

「西条、今度は前に出過ぎるなよ」何人かが頷いた。西条は不服そうに俺のせいかよという顔をした。

後半、私は相手ゴールの見える位置に立った。英輔が隣にいる。彼はまだ余韻を引きずって疲れているようだった。

笛が鳴る。取りあえず同点に持ち込まなければならぬ。その思いは皆同じだったのか

ボールを奪うと果敢に攻撃した。だがマークが厳しくてなかなかパスが通らない。イチカバチカのシュートを繰り返す。とにかくパスが飛んでこない。たまに英輔にはパスが行くのだが英輔の周囲には、常にマークが数人いてボールを取られてしまう。膠着状態が続いた。

十五分が過ぎる頃に何らかの指示があったのか、何本か私にパスが回ってきた。すぐに蹴れと言われていたからすぐに蹴ったが空振りしたり弱々しいシュートだったりゴールする可能性はほとんどない。そのうちに英輔に強い当たりのパスが放たれた。相手は英輔の周りに集まっっていく。ゴールキーパーも正面に集中している。無理だろうなと思った瞬間、英輔は意図的に空振りした。スルーパスが明史の眼前に転がってきた。キープする間は無かった。ゴールは右側面からはガラ空きだった。私は無我夢中でボールを蹴り込んだ。そしてゴールネットを揺らしたのである。

「やったぜ！」だが賞賛されたのは英輔の頭脳プレーだった。部員たちは英輔の頭を叩いて喜んでいる。もはや英輔はヒーローだった。さくらでさえも私に声援は送らなくなっていた。殊に希海の声援の送り方は常軌を逸した凄まじいもので声を張り上げていた。私はゴールしたのに残念で仕方ない。ただひとり英輔だけはありがとうと握手を求めてきた。それから何本かのシュートが打たれたが、パスは回って来なくなった。やはり私にパスを回すよりも自分でシュートして決めたいと思ったのだろう。それは仕方なかった。私は一本だけなんとか決めたものの失敗が多すぎた。坂本先生はパスを回せと罵るように叫んでいたが誰も言う事を聞かなかった。

とうとう時間もなくなってくる。思い直したのか、それでも英輔だけは自分に回ってきたパスを私に回した。受け取っても敵が前にいてシュートできない。私は英輔に戻そうとしたが時すでに遅く私の周りは敵だらけになってしまった。あっけなくボールを取られたので私は慌てて青いユニフォームを追いかけた。どこまでもどこまでも追いかけて行った、追いつけるはずもなくセンターラインあたりで私はボールと無関係の相手の脚を蹴った。するとそれを見ていた別の青いユニフォームが私のシューズを引っ張った。半ば乱闘染みしてきた。折り重なるように数人が掴み合う。

審判が飛んできて私たちを引き離そうとした。プレーを中断する笛を鳴らした。ちやうど終了する時間だったので一気にみんなが弛緩した。西条は引き分けだと思っセンターラインにのこのこと歩いてきた。

「まだだろう」そう言い合っていたのは私の周囲、敵味方の数人。ボールの行方を捜すとゴール脇まで運ばれていてもう一度笛が鳴るのを敵はハンターのように待っていた。「戻れ！」私は西条に言ったが、西条が私の言うことなど聞くはずもない。音がするのと同時にボールはゴールに叩き込まれた。西高イレブンは、はしゃいで喜んでいた。

再び音がした。私たちは負けた。応援している人たちから失望の大きな溜息が漏れていた。フォワードになってから走り詰めだったので、私は心底疲れてしまいその場にへたり込んだ。

「アンディ。サッカーは向いてないみたいね」さくらは私の耳元で囁く。明日、私の家においでよ。この前の続きやろうよ。

試合後のミーティングでは坂本先生の怒りが収まらず散々に私たちは怒鳴られた。他校との試合に負けた時にはグラウンドを何周も走らされるというルールがあった。負傷した

英輔を除いて私たちは日の暮れるまでグラウンドを駆け巡った。その間、幾度となく西条は私を罵倒してきたから私も言い返した。だが私は西条が悪いのだと信じて疑わなかった。

希海たちも何周かは一緒に走ってくれたが、もう帰るねと部室の方に走り去った。

日が落ちて辺りが闇になる頃、スーツ姿の坂本先生が「もういい」と言った。私と西条は芝生の上に横たわった。他の生徒はそのまま部室に戻っていった。

芝生の脇には葉桜が見えた。意識が遠くなりそうだった。西条がまだ文句を私に言ってきたが私は言い返す気力もなかった。

葉桜の梢の向こうで白いものが動いていた。長い脚が背伸びしている。踵が浮いていた。張り詰めた脚は希海のものではないだろうかと私は思った。背中もいつも見ていたからおおよその輪郭は覚えていた。爪先立ちで何をしているのだろう。ショートパンツの赤が微かに揺れている。

いつの間にか西条も木立に視線を泳がせていた。

「くそおっ、英輔ばかり良い思いをしやがって」西条は言うけれど私には英輔など見えな
いのだ。

だが希海などすでにどうでもいいと思っていた。目を逸らして見ないことにした。

(了)